

生活実践力の育成による人間教育

— 家庭科授業モデルの構築 —

(平成 28 年 8 月 31 日提出, 11 月 4 日受理)

Humanistic Education Based on upbringing of practical skills for life — Practical skills for life —

奈良学園大学人間教育学部

西江 なお子

NISHIE Naoko

Nara-Gakuen university

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：生活実践力, 体験・交流・評価活動の往還

Abstract : The fact that classroom instruction has not been utilized in real life may be considered as one of the problems of home economics education. It can be inferred that a problem in the teaching method constitutes a factor of this. In the present study, we defined "practical skills for life" as the ability to continuously utilize the contents of the home economics course in elementary school in life and the attitude and skills to improve one's life. Based on the results of analyses of previous studies, it was revealed the following: a lack of experiential activities in the home as the place of children's living, nominal interaction activities to deepen learning, and lack of assessment activities. Therefore, with the hypothesis that it is possible to develop practical skills for real life, we constructed an instruction model by sharing experiences, interactions, and evaluations. It is important to have students become aware of subconsciously present knowledge and skills, which leads to problem solving, and connect the knowledge with practical skills for life by allowing students to realize what they did not know through study.

Keywords : practical skills for life, sharing experiences, interactions, and evaluations

1. はじめに

(1) 問題の所在

現行の家庭科学習指導要領の目標は、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てることである。しかし、日本家庭科教育学会による小学生を対象とした、家庭生活についての全国調査(2007)において、家庭科の学習は「将来家庭生活で役に立つ」と答えた割合に比べ「実生活で役に立つ」

と答えた児童の割合が少ないことや、家庭において、手伝いではなく分担した家事仕事をしている児童が減少していることが明らかとなった。また、総務省の調査(2011)において、小学 5, 6 年生の家事時間は 4 ～ 6 分であることも明らかとなった¹⁾。以上の調査結果から、授業で学んだ知識や技術が実生活で十分生かされていないことが家庭科教育の課題の一つであると推察される。

児童にとって実生活で役に立っているという実感がなく、家庭での実践につながっていないとする要因を検証する。中教審教育課程部会(2016)では、社会構造の変化や家庭・地域の教育力の低下を挙げている。

また、野本(2016)は、家庭科は小学校5、6年生にのみ位置付く教科で、指導機会が他教科と異なり限定的であり、教科研修が十分に行われているとは言い難い現状を指摘している。加えて教員に採用された後も、高学年の学級担任(あるいは家庭科専科の担当)にならなければ家庭科の授業を担当することはほとんどないことに加え、家庭科担当は各学校に一人の場合が多く、授業の相談をする相手がおらず、教員が研修する場が限られていることも指摘している。また、小学校家庭科を指導する教員は、家庭科指導の困難な点として、時間、個人差への対応、教材指導方法が挙げている²⁾。これらの実態から、児童が実生活で役に立っているという実感が持てない要因の一つとして、家庭科授業の在り方に課題があることが考えられる。

(2) 本稿の目的

本研究は技能と態度が日常化され、生活実践力の育成が図られる授業モデルを検討・構築することを目的とする。

2. 先行研究の整理

(1) 家庭科授業の現状と課題

文部科学省(2014)は、子どもの「学び」の過程は「感覚(体験)→思考(振り返り)→実践(活用)」であり、体験を通して考えを深め、実生活や社会のあり方を学んでいくと明言している³⁾。

また広島県教育委員会(2014)は、学習を通して感じたり気づいたりしたことを、友だちと交流し、共有化することを通して、学びを深め体験活動の効果を高めることができると指摘しており、友だちとの交流が、体験活動での学びの向上に有効であるといえる⁴⁾。

加えて片桐ら(2018)は、他者評価により、無自覚だった子どもたちの行為を価値付けすることができる⁵⁾と述べている。

文部科学省(2018)は、自己評価により課題をいかに解決したかや、学ぶ意欲を自分自身で評価することにより、学習意欲の向上につながるとしている⁶⁾。

野田ら(2005)は、特に「家族からの感謝の実感」は家事参加の実態を高めるだけでなく、家庭生活への積極性を育てると分析している⁷⁾。家庭での体験活動において、家族から称賛される場面が多いほど生活実践力につながると考えられる。先の野田によると、手伝いをする程度が高い児童は、「家族からの感謝」を実感している割合が82.7%、一方手伝いをしな

い児童の21.5%が「感謝されていない」と感じており、手伝いの程度と家族からの感謝の実感とは密接な関係があることが示唆された。

しかし、西の学習指導案分析によると、多くの学習方法が「問答」「話し合い」「調べ活動」「研究発表」であり、これら各々は現代の児童の興味関心を引き、主体的な学習を成立させているとは言い難いと解釈している⁸⁾。

体験活動で学ぶ喜びや意欲の向上につないでも、発表や報告で一方向的に聞いて終わったり、他者評価される場面がなく、自分の学びを価値づけしたりすることができず、生活をより良くしようとする生活実践力へとつながらない授業が目立つのが現状である。

(2) 体験活動

田中らによると、児童が学習したと記憶している割合が高い領域ほど、定着度が高いという結果が明らかとなった⁹⁾。

また鳥羽ら(2012)によると、学校での体験活動後、家庭でも同様の体験を指導計画に組み込み、児童の様子を報告し連携を図ることにより、家庭での実践の定着につながったと報告されている¹⁵⁾。

しかし、限られた時間内でねらいを明確にし、ある程度長期にわたる直接体験を行っている学校は少ないのが現状である。

本研究においても、学校と家庭で体験活動を指導計画に組み込み実施していくことにより、生活実践力の向上を目指していく。

(3) 交流活動

本研究においては、一方的な発表形式ではなく、双方向の意見交換により、学びが深まる活動を行う。鳥羽ら(2012)によると人と関わる力を指導に組み入れることにより、授業実践から期間が空いても、継続的な家庭実践となるきっかけとなったことを明らかにしている。勝海(2013)は、交流活動の意義を以下のようまとめている。

児童の生活体験の減少などの要因から、児童自身が課題設定を行うことの困難さを指摘しており、自らの生活体験が学習対象とどのような関係にあるのかを意識化させることで、解決可能である。またその際、学習対象を自分自身に関連するものとして捉える方策として、話し合い活動に着目し、探求過程としての学習活動を充実させることが重要である。課題共有することで、関心や生

活改善意識の上昇が認められ、時間が経過してもそれらは下がりにくいことを明らかとなった。これは、学習者間で相互評価し、生活上必要な知識や技能を理解しようとする意識の高まりが生じたからである¹⁷⁾。

以上から、本研究においても学校と家庭での体験活動の前後に交流活動を取り入れることを通して、児童の学びをより深めていく。

(4) 評価活動

評価の種類は大きく分けて、基準による分類、時期による分類、主体による分類があり、特に主体による分類に位置する自己評価、他者評価(家族からの評価も含む)に本研究は着目する。

教育課程審議会答申(2000)において、「生きる力」の育成における自己評価の重要性が提示された。しかし、学校現場では自己評価と称して授業の感想を書いたり発表をしたりする形の授業が目立つ。その理由として古内(2002)は、時間の不足、方法がわからない、面倒だから、という点を挙げている教員が多いことを論じている¹²⁾。本研究における自己評価は、古内の自己評価である、①課題を持つ ②生活の中から課題解決のための情報収集を行う ③課題解決のためのいくつかの方法を考える ④実践する項目を一つ決め、実践する ⑤実践結果から、次の実践項目を決める、という手順で行い、生活実践力の向上につないでいく。

各自の課題は以下のものとする。本研究は後述する住分野の清掃に関する学習であるため、「学校の汚れが目立つ場所を清潔にする方法」という点から設定し、その実践のためにどのようなことに取り組むことができるか課題を設定させ、体験活動を学校で行わせる。課題設定としては、「清掃方法」「清掃道具」などが予想される。

大阪府教育センター技術・家庭科研究プロジェクト・チーム(2005)によると、自己評価を単なる感想にすることなく、観点を的確に提示する必要がある、教員は児童が書きやすいように自己評価表に書き出しを加えるなどの必要性を示唆している¹³⁾。そこで本研究においても、児童の自己評価表に「友だちとの交流で言い忘れたことは…」という書き出しを自己評価に記しておき、書くことへの抵抗を少なくし、児童自身が自己を見つめることができるよう工夫する。

他者評価においては、教育課程部会(2016)において、生活の中から問題を見出して課題を設定し、解決

するために、生活をよりよくしよう工夫する能力として、「他者の思いや考えを聞いたり、自分の考えをわかりやすく伝えたりして、計画・実践などについて評価・改善する力」を挙げている¹⁴⁾。友だちと学校・家庭での体験活動を通して単に報告する活動から、友だちに伝えたり聞いたりして、自分の学びを振り返り評価したり次の課題を設定し、その解決方法を思考するための評価として実践の中で扱う。小椋ら(2012)は、高等学校学習指導要領に位置づけられたホームプロジェクトにおいて、自己評価と他者評価を取り入れた。その結果、自己の生活を多面的に見つめる機会となり、自分の活動を客観的に捉えたり、他者からの肯定的評価を受けたりすることにより実践意欲の向上につながったことを明らかにしている¹⁵⁾。対象が小学生と高校生の違いはあるものの、他者からの評価は自分の学びを振り返り、次への活動に活かす動機づけとなることが言える。本研究においても、友だちからの肯定的評価により、児童が課題解決へと向かい生活実践力の向上が図られるように指導計画の中に、組み込んでいく。

家族からの評価においては、先述したように家族の働きかけが参加度に大きく影響を及ぼしていることが明らかである。本研究においては、体験活動を家庭で行い、その取り組みの過程を家族から手紙という形で認めてもらう場を設定する。文部科学省(2015)は、人の役に立った、感謝された、認められたという「自己有用観」は、自他ともに肯定的に受け入れられることで生まれると述べており²¹⁾、この経験の積み重ねにより児童の自身は持続し、生活実践力が育成されると推察される。本研究においても、学びが他者から認められる経験を授業に組み込み、家族の役に立つ喜びを味わわせる活動を行う。

3. 題材開発「体験・交流・評価」の往還

(1) 本稿における「生活実践力」の捉え方

西は、家庭科は家庭生活を中心とした人間の生活を対象としているため、家庭科における実践力を「生活実践力」と定義している¹⁶⁾。渡瀬らは児童・生徒が自らの生活をよりよくしようとする取り組みを「生活実践力」と捉えている¹⁷⁾。また、福田は小学校家庭科で育む「生活実践力」とは、見出した生活の課題に応じて思考し、判断し、適切な解決方法を導き出しながら、おりよい生活をめざして主体的に行動する力と捉えている¹²⁾。本研究においては、小学校家庭科で

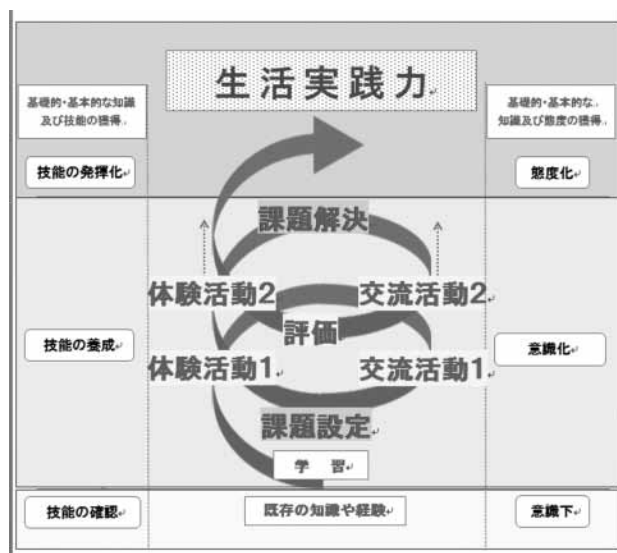
の学びを生活の中で継続して実行し、生活をよりよくしようとする態度や技能を「生活実践力」と定義づけることとする。

(2)「生活実践力」の向上を目指した授業モデル

西江の「生活実践力の育成を目指した小学校家庭科モデル開発に関する研究 ―実感を伴った理解へと導く体験的活動を通して―」において、児童に節電を日常化させ、生活実践力を高めることを目的に、体験活動を取り入れた学習は、ある一定の成果を得ることができた¹⁸⁾。その理由として、体験活動を取り入れた実践の3か月後においても「まだ節電はできる」という意識が持続しており、自身の節電行動に満足しておらず、まだ改善の余地があると解釈していたからである。加えて、児童のみならず家族にも節電の意識が浸透し始めていることが、追跡調査の結果明らかになった。自転車発電機により電気のエネルギーを実感を伴って理解する体験活動を行った。課題を見つけ自発的に調査したり実際に試したりして課題解決を図っていき、節電について深く学ぶことができた。しかし、「家族に言われなくても自分から節電する」児童の割合が3か月後には低下し、節電への意識は持ちつつも長期にわたる生活実践力を身に着けた児童の割合が減少したことが明らかとなった。生活実践力とは「学びを生活の中で継続して実行し、生活をよりよくしようとする態度や技能」と定義したが、学習後ある一定期間が経過するにつれ、継続困難な結果となることが明らかとなった。生活実践力の育成には体験活動だけに頼らない、さらなる授業の工夫が必要であることが課題として残った。

そこで、「体験」「交流」「評価」の往還による探究活動を図っていくことが生活実践力の育成に有効であるという仮説の下、授業モデルを構築しその有効性を立証することを目的に、本研究テーマを設定した。図1は、生活実践力を高める授業モデルである。

モデル図の最下段は学習以前から、児童自身が意識しない意識に位置する、児童が日常生活の中で体得した知識や経験が下支えとなって存在している。学びはこの位置から始まり、生活実践力へとつながる。高崎らは、達成できるようになったことは意識されやすく、十分達成できなかったことは意識されにくいと論じている。また、意識されにくい事柄をふり返る際、手立てを工夫することにより、本人が自覚していなかった自身の課題が見出しやすくなることを示唆している¹⁹⁾。学習のはじめにこの知識や技能が個々の児



(図1) 生活実践力を高める授業モデル

童にどれだけ備わっているのかを児童自身に確認させることを通して、自分を客観視させ、教員は児童の実態を把握し授業を進めていく。

実態把握のもと、指導計画に則って学習を進める。文部科学省は、家庭科において育成すべき資質・能力として、「日常生活の中から問題を見出し、課題を設定する力を明記している。また、児童が主体的に実践できる能力と態度を育成する手段の一つとして、自己の生活課題を見つめ、学習したことを生活に生かすための工夫」を求めている。武添は、児童自ら課題を見出し、課題を解決していく探求型の問題解決的な学習を行っていく必要があるとしており²⁰⁾、本研究においても児童が探求的に課題を解決していくことを通して生活実践力を高めていくものとする。

5. 授業モデルに基づく授業計画

1) 題材設定について

家庭科の目標は、どの分野においても家族の一員として実践的な態度を育成することであるが、児童及び家庭科担当教員の家庭科への興味関心には分野により大きな偏りがあることが明らかとなっている。

以下、正岡ら(2014)による小学校家庭科における住教育の実態と課題から、住分野の現状をまとめる²¹⁾。

教員自身が興味のある分野は調理(実習)が60.2%と上位を占め、最も興味のないものとしては9.7%の住居分野であることが明らかとなった。その要因の一つとして、バリアフリーなど、総合的な学習の時間に扱われることが多い学習内容

も、小学校学習指導要領の住分野には記載されておらず、関連付けの必要がないと捉えられていることが多い。また、住分野を住宅単体ととらえており、本来は様々な扱い方ができるものの、教員の住分野が対する認識や知識の低さも要因と考えられる。教員からみた小学生の学習への関心が高い分野の最上位は食物の98.9%、低い住分野の最上位は65.7%の住分野であることが明らかとなった。ではなぜ、教員と児童の興味が住分野で低いのだろうか。家庭科の他分野との比較から、住分野を扱う時間が少なく、学年により全く実施しないという偏りがあったり、他教科との関連付けの困難さがあつたりすることが考えられる²³⁾。

次に、児童が抱く家庭科学習全体に対する感覚を山口県がまとめたものから検証する²³⁾。

家庭科を嫌いとする理由に5年生は「学習に楽しさを感じない」「面倒くさい」が挙げられ、6年生になると「分からない」「苦手である」ととらえる児童が増加することが明らかとなった。授業を楽しくするためには、「先生から分かりやすく丁寧に教えてほしい」「グループ活動の時間を増やしてほしい」「学習に必要な用具を増やしてほしい」とする希望が挙げられた。これらの調査から、教員は児童に達成感を持たせられる指導の工夫と題材に応じた教材教具の準備の必要性が明らかとなった。

以上の結果より、家庭科学習の住分野は教員、児童にとって関心が低いことが明らかとなった。教員は指導方法に困難さを抱いており、児童は学習機会が少ない住分野に興味薄い。また、家庭科学習そのものに対する児童の要望として「分かりやすい授業」が挙げられている。このことから、住分野の清掃学習において、児童の興味関心を高め、意識下にある感覚を意識化させ、生活実践力の向上へと向かう過程に、「体験・交流・評価」活動を組み込むことで、児童にいかなる変容が生じ、学びを深めていくのかを検証することを目的として、本研究の実践の題材を住分野の清掃学習に設定した。

2) 学習指導要領における清掃学習の位置づけ

現行学習指導要領では、内容項目「C 快適な衣服と住まい (2) 快適な住まい方 ア住まい方への関心、整理・整頓及び清掃」に位置づけられており、住まい方に関心をもって、整理・整頓や清掃の仕方が分かり工夫ができることを指導項目としている。また、内容

項目「A (2) 家庭生活と仕事」と関連させ、整理・整頓や清掃を家庭で分担できる仕事や家族への協力につなげて実践させることも考えられると明記している。清掃体験としては、児童が日常よく使う場所を取り上げ、清掃の意義や汚れの原因、汚れの種類や清掃方法など、状況に応じた清掃の仕方を考え工夫して適切に清掃ができる児童を育てることをねらいとしている。また、内容項目「D (2) 家庭生活と仕事」の学習との関連を図り、家庭での清掃の経験をもとに、その場所を使う家族の気持ちを想像したり、協力して清掃をした感想を聞いたりするなど、実践する喜びや家族とのかかわりを感じながら学習を進めることも考えられるとしている²⁴⁾。

以上より、清掃学習は単に清掃の技能や知識の習得だけではなく、家庭科の目標にある「家族としての一員」としての自覚を育て、家族のために環境を快適にする清掃に意義を見出し、そのために自分は何ができるかを考え、課題解決していくことが重要である。

3) 実践の概要

《題材名》

「劇的清掃ビフォーアフター ～今の私にできること～」

《題材の目標》

- ・清掃に関心を持ち、身の回りを清潔に保つことの心地よさに気づく。(興味・関心・態度)
- ・汚れに応じた清掃の仕方が分かる。
(知識理解)
- ・汚れに応じた清掃の仕方を考え、家族の一員としての自覚を持ち、工夫して実践することができる。
(創意工夫、技能)

《評価規準表》

関心・意欲・態度	創意工夫	技能	知識・理解
健康的で気持ちのよい生活をするための清掃に関心を持つ。	汚れに応じた清掃の仕方や手順を考えたり工夫したりしている。	清掃用具を正しく使い、材質や汚れに応じた清掃ができる。	清掃に必要な用具やその用具の扱い方、材質や汚れに応じた清掃の仕方を理解している。

《指導計画(全5時間 家庭2時間別)》

時	学習内容	評価規準 (評価方法)
1	<div>清掃活動への意識調査を行う</div> <ul style="list-style-type: none"> ・清掃への意識を好きか嫌いかという10段階に分け、学習前の清掃へのイメージを児童に意識化させる。 <div>教室の汚れの実態を把握する</div> <ul style="list-style-type: none"> ・教室の汚れをグループで撮影したり、実際に清掃したりして調査し、汚れの種類や場所について、グループで整理する。 ・振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・清掃に関心を持ち、汚れ調査を行いその整理ができる。
2	<div>劇的清掃ビフォーアフターの計画を立てる</div> <ul style="list-style-type: none"> ・どこにどのような汚れがあるのかを再確認することを通して、自分たちの掃除方法や掃除に対する意識に気づく。 ・前時の調査結果をもとに、清掃計画を立てる。 ・使用道具、清掃方法について調べたり、道具を製作したりして、次時の清掃の準備を行う。 ・振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・清掃の計画を友だちと協力して立てることができる。
3	<div>劇的清掃ビフォーアフターの実行</div> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の担当場所の清掃を行う。 ・清掃道具の使用方法や汚れの拭き方についてまとめる。 ・振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動後、道具や汚れの拭き方についてワークシートにまとめることができる。
家庭	<div>家庭で清掃計画を立ててくる</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに、場所や汚れ具合などを明記し、その清掃計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・清掃計画を、その方法や使用道具を明らかにしてワークシートに書くことができる。
4	<div>家庭での清掃計画を交流する</div> <ul style="list-style-type: none"> ・互いの計画を交流する中で、自分の清掃に活かしたい事柄を見つけ、実践へとつないでいく。 ・振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの清掃計画を聞き、自分の清掃へと反映させたり、自分の清掃計画を友だちに発信したりすることができる。
家庭	<div>家庭での劇的清掃ビフォーアフターの実行</div> <ul style="list-style-type: none"> ・計画をもとに実行し、ワークシートにその様子を書く。 	
5	<div>家庭での実践についての交流会</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭での清掃の様子をワークシートに書くことができる。

<ul style="list-style-type: none"> ・家庭で行った実践について、友だちの意見を聞いたり、自分の経験を語ったりする。 ・家族からの手紙を読み、今の感想を書く。 ・振り返りを行う。 	<div>清掃活動への意識調査を行う</div> <ul style="list-style-type: none"> ・授業初めと同様の清掃への意識を実施し、学習を通して清掃へのイメージの変容を児童に意識化させ、学びを価値づける。
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

①家族の一員としての自覚

「自分を見つめること」から学習をはじめ、家族の一員としての自覚をもって、家族のために生活実践力を発揮することをねらいとして、副題を「今の私にできること」と設定した。服部ら(2014)は、家庭科教育において「自分を見つめる」ことを「一人ひとりが自分の生活を振り返り、自分の価値観を問い、自他を尊重することを通して、主体的に生活を想像していく力を養うこと」と定義している。中学・高校の家庭科教員を対象とした「自分を見つめる」学習に対する教員の意識調査の結果が次のとおりである²⁵⁾。

教員は「自分を見つめる」家庭科教育をする分野として「家族」に次ぎ、「住分野」にやりにくさを感じていることが明らかにした。その理由として、生徒の個人差や配慮の難しさ、授業づくりの難しさ、時間不足や指導方法やプライバシーへの配慮の困難さなどを挙げている。

この結果から学習対象者が児童ではないものの、小学校にも対応すると考えられる。そこで、本研究においても、自分を見つめることにより今までの自分の清掃態度や方法を振り返り、そこから課題を見つけ、解決していく学習を進めていく。

以上の結果より、家庭での清掃の調査や体験活動においては各家庭環境の状況を十分に把握し、体験活動が困難な児童も学習の機会を公平に与えられるよう配慮する。また、家族からの感謝の実感を得る手紙についても、その趣旨を家庭科新聞で周知徹底し、先に述べたプライバシーへの配慮を怠ることなく指導を進めていく。

教員からは、評価規準による評価以外に、全授業終了時に児童一人一人に劇的清掃アドバイザーとしての「名刺」を渡す。一連の学習を終え、清掃についての知識と技能を身に着けた児童が、清掃を必要とする人

のために力を発揮する喜びを味わうことは、学びの継続に不可欠である。その際、自分が清掃のアドバイザーとして働けることに満足感が得られるよう、その意味づけである。

②「体験・交流・評価」活動の往還

伊波ら（2014）は、家庭科教育は学習開始前から対象（家庭生活）との関わりを持っているという特性に着目し意識化及び「分かったつもり」への働きかけに、家庭科教育の独自性を見出した²⁶⁾。本研究における清掃学習は日常生活の中で、既に行っている活動であり、伊波の示唆する「分かったつもり」の児童が多数いる。しかし、学校と家庭での体験活動を通して知らなかった自分に気づかせる意識化は、交流活動を通して自分の生活課題を客観視することで可能となる。勝浦（2013）は、学習者が他の学習者と相互評価をする過程において、生活課題を想起でき、生活に必要な知識を理解しようとする意識が向上し、学習後時間が経過しても生活改善意識が下がりにくいことを明らかにした²⁷⁾。

以上の「体験・交流・評価」の往還を、本研究では少なくとも2回行い、その有効性を立証する。1回目の体験と交流は学校での清掃学習である。計画に沿って清掃方法や道具の工夫を行い、実行する。次にその体験を友だちと交流し、相互評価することを通して新たな学びを得る。二回目の体験と交流は家庭での清掃学習である。学校での学びを、児童の生活の場である家庭で活かすにあたり、学校とは異なる環境下で、児童は「分かっていたつもり」の感覚になる。今までの経験だけでは対応しきれない課題にぶつかり、新たな課題解決のために学校での知識や技能が活かされ、技能が養成されていく。次にこの体験を学校で交流し、家庭という違う環境の下、相違点を見出し学校での体験では得られなかった新たな学びを獲得する。そこから、環境に関わらず共通した清掃の仕方に気づくとともに、清潔な環境を維持する気持ちよさを実感させる。

以上、学習の最終段階で、家庭からの感謝を実感する手紙を受け取り、自分の学びを価値づけする。実践後、失敗に終わったとしても、頑張った過程を認めほめられたことが、新たな実践意欲につながると考える。家庭の清掃を終え、手紙でその頑張りを認めてもらうことで、取り組んだことに対する達成感を味わわせ、家族の喜びのために自分にはできることがあるという感覚が、生活実践力向上には欠かせない大きな動

機である考える。

6. 終わりに

本研究は、授業での学びが実生活で十分に生かされていないことを家庭科教育の課題の一つとして取り上げた。その解決法として「体験・交流・評価」の往還による授業モデルを構築した。内閣府は『平成20年版国民生活白書』（2009）において、「現代の生活の諸問題を解決するためには、生活者は生活力の向上のための知識・技術の習得を意識的に行うとともに、受け身ではなく、積極的に生活の諸問題に取り組むことが求められている」と明記している。

児童もまた一人の生活者であり、家族の一員としての自覚を持ち、身につけた知識や技能を生活の場で発揮していくことが必要である。そのためには、教員は今一度家庭科授業のあり方を考察し、課題を分析する必要がある。特に本稿においては、体験、交流、評価活動の位置づけが極めて曖昧で、時間不足などを理由に実施していなかったり、形だけ実施していたりする状況であることが明らかとなった。また、衣・食分野と比較し住分野は、教員・児童共に不支持傾向が強いことも認められた。しかし、生活を支える衣食住に関する知識・技能を偏ることなく児童に身につけさせ、日常生活で活かせる力を育成することは、家庭科教育の責務である。

今後、本研究の授業モデルを小学校現場で実施し、その有効性を立証していく。

【参考・引用文献】

- 1) 総務省統計局『社会生活基本調査』, 2011
- 2) 野本理『小学校教員を対象とした家庭科指導の支援に関する研究』, 2014
- 3) 西敦子『生活実践力を育成する家庭科授業の創造』明治図書, 2005
- 4) 文部科学省『体験活動の充実の基本的な考え方』, 2014
- 5) 広島県教育委員会『体験活動の充実』, 2014
- 6) 片桐修・木村吉彦『他者評価に基づく探求的な学習における自己肯定観・自己有用観の育成』上越教育大学教職大学院研究紀要 第1巻, 2016
- 7) 文部科学省『学習評価に関する資料』, 2016
- 8) 野田文子・伊藤幸・柴田柿美『大阪市内小学生の家事参加の実態と家族からの励まし—全国調査との比較から—』生活文化研究 / 大阪教育大学家政学研究

- 会編, pp.39-49, 2005
- 9) 中国四国小学校家庭科教育研究会『第14回研究紀要』(山口大会)
- 10) 西敦子 前掲3), 2005
- 11) 渡瀬典子・長澤由貴子『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 2014
- 12) 福田公子・山下智恵子・林未知子『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』大学教育出版, 2004
- 13) 高崎昌己・佐藤裕紀子『知識・技能と課題の明確化を図る家庭科のガイダンスの提案 - 小・中学校のつながりに着目して -』茨城大学教育実践研究 pp.249 - 258, 2015
- 14) 武添寿子『生活実践力をはぐくむ家庭科学習指導に関する研究 - 問題解決的な学習における「課題発見」「評価, 改善」の家庭を充実させた大在校生の工夫を通して -』平成26年度教員長期研修(前期), 2016
- 15) 鳥羽波峰・久保桂子『小学生の家事参加を促進する授業の開発』日本家庭科教育学会第55回大会, 2012
- 16) 勝海由里子 上越教育大学教職大学院『家庭科における生活改善意識の向上に関する事例的研究』日本家庭科教育学会第56回大会 2013 例会(2013)
- 17) 古内治『自己評価活動が学校を変える』明治図書 pp.12-22, 2002
- 18) 大阪府教育センター技術・家庭科研究プロジェクト・チーム『技術・家庭科教育の指導と評価』, 2005
- 19) 教育課程部会 家庭, 技術・家庭ワーキンググループ『家庭, 技術・家庭(家庭分野)において育成すべき資質・能力の整理(案)』資料8-1, 2016
- 20) 小桝由美・長谷川真由美・長谷中久美・鈴木明子『ホームプロジェクトにおける自己評価と相互評価の効果に関する研究』日本家庭科教育学会第55回大会・2012 例会, 2012
- 21) 文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター『「自尊感情」?それとも「自己有用観」? Leaf.18』2015
- 22) 正岡さち・小谷智恵・亀崎美苗・田中宏子『島根県の小学校家庭科における住教育の実態と課題』島根大学教育学部紀要(教育科学)第46巻 pp.53-60, 2014
- 23) 中国四国小学校家庭科教育研究会 前掲9)
- 24) 文部科学省『学習指導要領家庭編』
- 25) 服部晃次・鈴木真由子『家庭科教育における「自分をみつめる」学習の配慮事項の検討 - 家庭科教員を対象にしたヒアリング調査を通して -』大阪教育大学紀要 第V部門 第61巻 第2号 pp.85-93, 2013
- 26) 伊波富久美『家庭生活について理解を深める家庭に位置づけた家庭科指導の方向性 - 学びの実態を踏まえて -』日本家庭科教育学会 第56回 2013 例会, 2013
- 27) 勝海由里子 前掲16), 2013